

パウロの協力者たち

共に働いた人々を知り、聖書の参照箇所からその関係をたどります。

バルナバ：代価を伴う励まし

バルナバは、ほかの人々がパウロを恐れていたときに彼を迎え、アンティオキアでの働きへ招き、共に旅をしました。使徒言行録は、その寛大さと励ましを重大な対立と共に描きます。読者は、彼を無欠点の人にせず、その奉仕を尊ぶことができます。

かつての敵を迎える

使徒言行録は初めに、バルナバをキプロス出身のレビ人ヨセフとして紹介し、畑の売却代金を共同体に献げたと記します。後には、信徒が以前の迫害者を恐れているとき、使徒たちの前でサウロを弁護します。この歓迎は、サウロの変った生き方についての証言に結び付いています。バルナバが示すのは寛大さと識別を伴う支援であり、霊的变化を主張する人を無条件に信じることではありません。

使徒言行録 4章36～37節・使徒言行録 9章26～30節

アンティオキアを力づけ、旅立つ

アンティオキアへ送られたバルナバは神の恵みを認め、信仰を保つよう励まします。タルソスへサウロを探しに行き、継続的に教える働きへ招きます。やがてアンティオキアの共同体は二人を共に送り出します。旅では歓迎も迫害も受け、リストラでは自分たちに向けられた礼拝を拒みます。宣教は、使者を売り込むのではなく、生ける神へ人々を招く働きです。

使徒言行録 11章19～26節・使徒言行録 13章1～3節・使徒言行録 14章8～18節

対立があっても忠実さを消さない

ガラテヤの信徒への手紙は、アンティオキアで異邦人との食卓の交わりから退く行動に、バルナバも引き込まれたと伝えます。使徒言行録は後に、ヨハネ・マルコを連れて行くかどうかでパウロと激しく対立し、別々に旅したことを記します。どちらからも、永続的な敵意の物語を作ってはいけません。二人の物語は、誠実な訂正と協力者の忍耐強い育成を促し、福音を指導者個人の評判より大切にするよう教えます。

ガラテヤの信徒への手紙 2章11～14節・使徒言行録 15章36～41節

聖書の参照箇所

使徒言行録 4章36～37節・使徒言行録 9章26～30節・使徒言行録 11章19～26節・使徒言行録 13章1～3節・使徒言行録 14章8～18節・ガラテヤの信徒への手紙 2章11～14節・使徒言行録 15章36～41節

出典

- The Acts of the Apostles

Acts 7–28; passage references are supplied in each section.

- The Pauline letters

Romans through Philemon; passage references are supplied in each section.

シラス：圧力の中での励まし

シラスはエルサレムの指導者であり預言者で、会議の知らせをアンティオキアへ携え、後にパウロと旅をしました。通常、パウロ書簡の冒頭に名があるシルワノと同一人物とされますが、使徒言行録は二つの名の関係を明示していません。

エルサレムからの信頼される声

使徒言行録は、エルサレムからの手紙をアンティオキアへ届けるため選ばれた人々の中にシラスを挙げます。彼とユダ・バルサバは預言者として多くの言葉で信徒を励まします。本人たちが赴くことで、異邦人の受け入れについて共同体が下した決定を伝えます。知らせは文書だけでは完結しません。信頼できる人々が説明し、力づけ、共同体が具体的な意味を受け止めるのを助けます。

使徒言行録 15章22～35節

苦しみを共にする

バルナバと別れた後、パウロはシラスを選びます。フィリピで二人は打たれ、投獄されます。使徒言行録は祈りと賛美、地震、看守の危機、家の人々の応答を描きます。また、二人のローマ市民権と、公に扱いを正すよう求めたことも記します。キリストへの信仰は、公権力による不当な扱いを容認するふりや、苦しみを本人の失敗のしるしと見なすことを求めません。

使徒言行録 15章40～41節・使徒言行録 16章19～40節

書簡を支える人々のつながり

テサロニケの信徒への手紙一とテサロニケの信徒への手紙二は、パウロとテモテと共にシルワノの名を記し、コリントの信徒への手紙二は三人の共同の宣教を振り返ります。これは宣教を、孤独な英雄の事業ではなく共同の働きとして読む助けになります。シラスとの同一視は一般的ですが、責任ある紹介では、その推定と本人を明記した箇所を区別します。励まし、旅、忍耐強く寄り添うこと自体が大切な奉仕です。

テサロニケの信徒への手紙一 1章1節・テサロニケの信徒への手紙二 1章1節・コリントの信徒への手紙二 1章19節

聖書の参照箇所

使徒言行録 15章22～35節・使徒言行録 15章40～41節・使徒言行録 16章19～40節・テサロニケの信徒への手紙一 1章1節・テサロニケの信徒への手紙二 1章1節・コリントの信徒への手紙二 1章19節

出典

- The Acts of the Apostles

Acts 7–28; passage references are supplied in each section.

- The Pauline letters

Romans through Philemon; passage references are supplied in each section.

テモテ：離れた教会をつなぐ信頼できる配慮

テモテは信頼される協力者として旅をし、パウロが直接訪問できない共同体を支えました。パウロの書簡は、実証された奉仕と人々への心遣いを強調します。知らせを運び、信徒を力づけることが、宣教の中心的な働きだったと分かります。

広がる宣教に加わる

使徒言行録によれば、テモテが初めに宣教に加わったのはリストラで、信徒たちが彼をパウロに推薦しました。母はユダヤ人、父はギリシア人でした。パウロが彼に割礼を施した判断は、その地域の宣教状況の中で語られます。ギリシア人テトスに割礼を要求しなかったことと併せて読みましょう。状況は異なり、どちらも割礼をキリストによる救いの根拠にはしていません。

使徒言行録 16章1～5節・ガラテヤの信徒への手紙 2章1～5節

信頼できる代表者

パウロはテサロニケの人々を力づけるためにテモテを送り、帰ってきた彼から励みとなる知らせを受け取ります。フィリピの信徒への手紙では、その真心からの配慮と実績ある奉仕をたたえています。これらは責任、関係、信頼を示しますが、完全な旅程は示しません。いくつもの手紙の冒頭にもテモテの名があり、パウロの手紙が共に働く共同体から生まれたことを思い起こさせます。

テサロニケの信徒への手紙一 3章1～10節・フィリピの信徒への手紙 2章19～24節・コリントの信徒への手紙二 1章1節

忠実な指導を学ぶ

テモテ宛ての手紙は、教え、人柄、会衆への配慮を結び付けます。伝統的なキリスト教の理解は、これをパウロの助言として受け取りますが、多くの現代の研究者はパウロの直接の執筆を疑問視しています。著者について広く合意のある手紙の伝記的証拠は、どちらの理解でも重要です。テモテの模範は、指導者の目立ちやすさや想像で作った性格描写ではなく、キリストに倣う配慮と実際に示された忠実さへ目を向けます。

テモテへの手紙一 4章12～16節・テモテへの手紙二 1章5～7節・フィリピの信徒への手紙 2章20～22節

聖書の参照箇所

使徒言行録 16章1～5節・ガラテヤの信徒への手紙 2章1～5節・テサロニケの信徒への手紙一 3章1～10節・フィリピの信徒への手紙 2章19～24節・コリントの信徒への手紙二 1章1節・テモテへの手紙一 4章12～16節・テモテへの手紙二 1章5～7節・フィリピの信徒への手紙 2章20～22節

出典

- The Acts of the Apostles

Acts 7–28; passage references are supplied in each section.

- The Pauline letters

Romans through Philemon; passage references are supplied in each section.

- An Introduction to the New Testament

Raymond E. Brown, An Introduction to the New Testament (Doubleday, 1997), chapters 30–31, “Who Wrote Titus and I Timothy?” and “II Timothy and Possibilities about the Pastorals”.

プリスキラとアキラ：仕事、教え、もてなし

プリスキラとアキラはパウロと共に働き、アポロを教え、教会の集まりに家を開き、パウロのために命を危険にさらしました。使徒言行録と書簡は複数の町での二人の働きを示しますが、移動のすべてや、その危険の具体的な場面までは説明していません。

コリントで共に働く

使徒言行録は、ポントス出身のユダヤ人アキラと妻プリスキラをコリントで紹介します。二人は、ローマのユダヤ人についてのクラウディウスの命令を受け、イタリアを離れていました。同じ職業だったパウロは、二人のもとに住んで働きます。その仕事場も宣教の物語の一部です。生計を立てる仕事、会話、旅、もてなしは、競合する働きではなく、結び付いたキリスト者の奉仕です。

使徒言行録 18章1～3節

賜物のある教師の成長を助ける

エフェソで二人はアポロの話を聞き、神の道をさらに正確に説明します。使徒言行録は、アポロが雄弁で知識に富みながら、なお教えを必要としていたと描きます。この出来事は、彼を弱点だけで判断することなく、忍耐をもって訂正する姿勢を示します。また、プリスキラとアキラの両方が関わったことも明記されています。ただし、按手礼を描いた箇所でも、後の教会職制の議論をすべて決着させる箇所でもありません。

使徒言行録 18章18～28節

家を開き、命を危険にさらす

パウロは二人をキリストに結ばれた協力者と呼び、命を危険にさらしたことに感謝しますが、その出来事を特定してはいません。ローマの信徒への手紙とコリントの信徒への手紙一は、それぞれの状況で二人の家に集まる教会に言及します。この模範は、家庭を人を迎え育てる場にするよう促します。不確かな旅の再構成を詳細な伝記に変える必要はありません。

ローマの信徒への手紙 16章3～5節・コリントの信徒への手紙一 16章19節

聖書の参照箇所

使徒言行録 18章1～3節・使徒言行録 18章18～28節・ローマの信徒への手紙 16章3～5節・コリントの信徒への手紙一 16章19節

出典

- The Acts of the Apostles

Acts 7–28; passage references are supplied in each section.

- The Pauline letters

Romans through Philemon; passage references are supplied in each section.

リディア：聞くこと、もてなし、新しい共同体

使徒言行録によれば、リディアはティアティラ出身の紫布を扱う商人で、フィリピでパウロの話を聞き、その知らせに応答し、宣教者たちを自宅に迎えます。彼女のもてなしは、生まれつつあるキリスト者の共同体の生活の一部となります。

川辺で耳を傾ける

パウロの一行は、フィリピの門の外で祈りに集まる女性たちと出会います。その一人が神をあがめるリディアで、主が心を開かれ、パウロの話に注意を向けます。使徒言行録は職業と出身地を述べますが、結婚の有無、財産の規模、それまでの信仰の歩みの全容は記しません。物語を語り直すときも挿絵でも、この不明な部分を残す必要があります。

使徒言行録 16章11～14節

家を開く

自分と家の者が洗礼を受けた後、リディアは旅人たちに自宅へ泊まるよう強く勧めます。この箇所は、信仰がもてなしという具体的な形になる様子を描きます。家族全体の洗礼と後世の洗礼実践との関係について、キリスト者の理解は分かります。本文は家の者の構成や年齢を列挙していません。創作した細部で、この広い問題を決着させてはいけません。

使徒言行録 16章15節

励ましが続く場所

牢を出たパウロとシラスはリディアを訪れ、信徒を励ましてから出発します。そのため彼女の家は共同体の集まりと結び付きますが、使徒言行録は後の正確な役職も、その後の経歴も記していません。脚色せずに、彼女の決定的な貢献を尊ぶことができます。神の働きかけ、注意深く聞く姿勢、キリストの民のために惜しまず家を用いることが、この物語で結ばれています。

使徒言行録 16章40節・フィリピの信徒への手紙 1章3～7節

聖書の参照箇所

使徒言行録 16章11～14節・使徒言行録 16章15節・使徒言行録 16章40節・フィリピの信徒への手紙 1章3～7節

出典

- The Acts of the Apostles

Acts 7–28; passage references are supplied in each section.

- The Pauline letters

Romans through Philemon; passage references are supplied in each section.

テトス：異邦人の受け入れと難しい和解

パウロの手紙に登場するテトスは、ギリシア人の協力者であり、コリントとの信頼できる仲介者であり、献金を整える仲間です。ガラテヤの信徒への手紙で無割礼であることが重要なのは、異邦人がまずユダヤ人にならなくてもキリストに属するからです。

争点のただ中にいた一人の人

パウロはテトスをエルサレムへ連れて行き、割礼を強制されなかったと述べます。ガラテヤの信徒への手紙では、この個人的な事実が異邦人信徒の自由と福音の真理を支えています。このエルサレム訪問を、使徒言行録のどの訪問と重ねるかには複数の見解があります。テトスの役割を根拠に、一つの年代再構成が確実であるかのように示してはいけません。

ガラテヤの信徒への手紙 2章1～10節

難しい知らせを運ぶ

コリントの信徒への手紙二には、テトスを待つパウロの不安と、コリントの人々の反応を聞いたときの安堵が記されています。テトスはエルサレムの信徒のための献金にも関わります。単なる配達役ではありません。パウロはその配慮と協力をたたえます。これらの箇所は、教会の和解に伴う心の負担と、説明責任のある運営を示しています。

コリントの信徒への手紙二 2章12～13節・コリントの信徒への手紙二 7章5～16節・コリントの信徒への手紙二 8章16～24節

配慮、教え、誠実さ

テトス宛ての手紙は、クレタでの働き、長老の任命、健全な教え、実際の善い行いを扱います。牧会書簡をパウロ自身が書いたかどうかは学界で議論され、伝統的な福音主義の解釈ではパウロの著作として擁護されています。この議論があることを明示しましょう。一連の資料を通して、キリスト者の指導は巧みな話術だけでなく、キリストの救いの恵みと、信頼できる行動という実りに照らして問われます。

テトスへの手紙 1章5～9節・テトスへの手紙 2章11～14節

聖書の参照箇所

ガラテヤの信徒への手紙 2章1～10節・コリントの信徒への手紙二 2章12～13節・コリントの信徒への手紙二 7章5～16節・コリントの信徒への手紙二 8章16～24節・テトスへの手紙 1章5～9節・テトスへの手紙 2章11～14節

出典

- The Pauline letters

Romans through Philemon; passage references are supplied in each section.

- Pauline Letters chronology

Pauline Letters chronology: Acts, the letters, dated external anchors, and explicitly qualified reconstructions.

- An Introduction to the New Testament

Raymond E. Brown, An Introduction to the New Testament (Doubleday, 1997), chapter 30, “Who Wrote Titus and I Timothy?”.

フェベ：奉仕、惜しみない支援、信頼

パウロはケンクレアイのフェベを、信頼できる奉仕者または教役者であり、支援者であるとしてローマの信徒に推薦します。彼女がローマの信徒への手紙を届けたという理解は、この推薦から広く推測されていることで、手紙が明言しているわけではありません。

宣教を支えた一人の女性

ローマの信徒への手紙16章1～2節は、フェベをケンクレアイの教会の人として紹介し、ローマの信徒に彼女を迎えて助けるよう求めています。パウロは、自分も多くの人も彼女に助けられたと認めています。これらの記述から、宣教を支える人々のつながりに女性の実践的な奉仕があったことが分かります。ただし、年齢、家族の来歴、具体的な資産、責任の全容は記されていません。

ローマの信徒への手紙 16章1～2節

肩書から分かること

ギリシア語の diakonos は、奉仕者、教役者、執事などと訳せます。この箇所が当時すでに定まっていた教会の職務を示すかどうかについて、キリスト者の理解は分かれます。支援者という表現は大きな助力を示しますが、そのすべての

形を特定してはいません。パウロが彼女の働きを公に尊んでいることと、短い推薦文に現代の職制をそのまま当てはめられないことの両方を大切にしましょう。

ローマの信徒への手紙 16章1～2節

手紙とともに人を迎える

16章の冒頭の推薦から、フェベが手紙を運んだ可能性は十分に考えられます。しかし、配達の旅の行程や、彼女が手紙を解説した際の記録は残されていません。パウロが実際に求めるのは、歓迎と援助です。キリストによって形づくられる共同体は、まだ知らない信徒を具体的に気遣って迎え、女性の奉仕を認め、連絡と交わりを支える人々に協力します。

ローマの信徒への手紙 16章1～2節・ローマの信徒への手紙 15章7節

聖書の参照箇所

ローマの信徒への手紙 16章1～2節・ローマの信徒への手紙 15章7節

出典

- The Pauline letters

Romans through Philemon; passage references are supplied in each section.

オネシモ：兄弟として迎えられる

オネシモは、パウロがフィレモンに願い出る中心人物で、コロサイの信徒への手紙にも名があります。パウロは愛する兄弟として迎えるよう求めます。手紙は彼が逃亡者だったと確定せず、最後の結果も記していません。

願いそのものから始める

パウロはオネシモを親愛の情を込めて語り、役立つ者となったと説明し、送り返すと述べます。何か不正や負債があれば、自分が責任を負うとも申し出ます。しかし、これらの言葉は以前の別離の事情を語らず、盗みを確定せず、どうしてパウロのもとへ来たかも示しません。よく知られた逃亡奴隷の筋書きは再構成であり、フィレモンへの手紙が直接語る出来事ではありません。

フィレモンへの手紙 1章10～19節

不平等な世界の中での兄弟関係

この願いは、パウロを迎えるようにオネシモを迎え、奴隷という分類を超えて愛する兄弟と認めるよう求めます。キリストにある家族関係を通して、二人の関係を問い直します。ただし、奴隷制廃止を直接宣言したり、法的解放を報告したりはしていません。責任ある読み方は奴隷制の暴力性を認め、社会的な解決を最後まで記していないことを、搾取の承認へ変えません。

フィレモンへの手紙 1章15～21節

つながっていても不完全な記録

コロサイの信徒への手紙は、ティキコと共にオネシモを挙げ、受取人の共同体に属する人と述べます。共通する人名は手紙同士を結び付けますが、同時の発送、同等の運び手としての役割、経路、投獄地を証明しません。再構成に余地があっても、実践的な課題は明白です。歓迎には、相手の尊厳を認めるために代価を払うことが伴います。有害な扱いを変えずに親愛の言葉だけを述べることはありません。

コロサイの信徒への手紙 4章7～9節・フィレモンへの手紙 1章17～21節

聖書の参照箇所

フィレモンへの手紙 1章10～19節・フィレモンへの手紙 1章15～21節・コロサイの信徒への手紙 4章7～9節・フィレモンへの手紙 1章17～21節

出典

- The Pauline letters

Romans through Philemon; passage references are supplied in each section.

エパフロディト：犠牲を伴う奉仕と尊ばれる帰還

エパフロディトはフィリピの人々からの支援をパウロに届け、奉仕の最中に死にかけました。パウロは公に推薦して送り返します。コロサイに関わる協力者エパfrasとは別人です。

一人の手に託された共同体の贈り物

フィリピの信徒への手紙は、エパフロディトを教会の使者であり、パウロの必要に仕える者と紹介します。贈り物を運ぶ彼の存在によって、経済的な協力が人と人との関係として見えてきます。パウロは彼を兄弟、協力者、戦友と表現します。これらは献身的な奉仕を尊ぶ言葉ですが、公式の伝記、家族の背景、本文を超える正確な旅の順序は示しません。

フィリピの信徒への手紙 2章25節・フィリピの信徒への手紙 4章14～18節

病気は失敗ではない

エパフロディトは重い病気になり、その知らせがフィリピの人々に届いたことを心配します。パウロは回復を神の憐れみとして語り、彼が亡くなればどれほど悲しかったかも認めます。本文は病気を恥とせず、働き手を使い捨てにもしません。弱さ、遠く離れた人への心配、回復への感謝、奉仕に伴う現実の心の負担を受け止めています。

フィリピの信徒への手紙 2章26～28節

敬意をもって迎える帰還

パウロは喜んで迎え、彼のような人を尊ぶよう教会に求めます。帰還は働きの失敗を意味しません。この模範は、キリストの自己献身とテモテの他者への配慮を述べた同じ章に続きます。共同体は目立たず代価の大きい働きを大切に

し、帰ってきた働き手をいたわるよう招かれます。エパfrasと混同したり、その別の協力者についての経験を彼に当てはめたりしないでください。

フィリピの信徒への手紙 2章5～11節・フィリピの信徒への手紙 2章29～30節・コロサイの信徒への手紙 1章7節

聖書の参照箇所

フィリピの信徒への手紙 2章25節・フィリピの信徒への手紙 4章14～18節・フィリピの信徒への手紙 2章26～28節・フィリピの信徒への手紙 2章5～11節・フィリピの信徒への手紙 2章29～30節・コロサイの信徒への手紙 1章7節

出典

- The Pauline letters

Romans through Philemon; passage references are supplied in each section.

ユニア：尊ばれた信徒と解釈の分かれる表現

パウロはユニアとアンドロニコを、共に捕らわれたことがあり、自分より先にキリストに結ばれた人として尊びます。ユニアは一般に女性と認められています。二人を使徒の中に含めているのか、使徒たちによく知られた人と述べているのかは、研究者の間で意見が分かれます。

挨拶から分かること

ローマの信徒への手紙16章7節は、ユニアとアンドロニコを初期キリスト教の人々のつながりに位置付け、その苦しみを記憶します。パウロが用いる同族の表現は、近い親族ではなく同じユダヤ人を指す可能性があります。この節は配偶関係を特定せず、投獄の事情や信仰に入った時点も説明しません。短い挨拶でも、詳細な伝記を再構成できないまま、その人の重要性を確かに示せます。

ローマの信徒への手紙 16章7節

表現の二つの読み方

Linda Belleville はギリシア語の用例と受容史から、ユニアとアンドロニコを著名な使徒の中に含める表現だと論じます。Michael Burer と Daniel Wallace は、使徒たちから認められているという読みを擁護します。これはユニアの性別とは別の問題です。前者を採る場合にも、ここでの使徒の範囲を検討する必要があります。この節は彼女を十二使徒の一人とはしていません。

ローマの信徒への手紙 16章7節

本文を超えて主張せずに尊ぶ

教会の職務を論じるキリスト者は、ユニアを無視したり、この一節を教会制度の全体像にしたりせず、両方の議論を正確に示すべきです。確かなのは、パウロが、自分より先にキリストに忠実となり、苦しみを経験した信徒を公に尊重していることです。こうした人々を記憶すると、宣教を有名な男性たちだけの働きと考える印象が正されます。

ローマの信徒への手紙 16章7節・ローマの信徒への手紙 16章1～16節

聖書の参照箇所

ローマの信徒への手紙 16章7節・ローマの信徒への手紙 16章1～16節

出典

- The Pauline letters

Romans through Philemon; passage references are supplied in each section.

- Junia and the apostles: the inclusive reading

Linda Belleville, “A Re-examination of Romans 16.7 in Light of Primary Source Materials,” New Testament Studies 51 (2005): 231–249.

- Junia and the apostles: the exclusive reading

Michael H. Burer and Daniel B. Wallace, “Was Junia Really an Apostle? A Re-examination of Rom 16.7,” New Testament Studies 47 (2001): 76–91.

ダウンロードした教材はインターネットに接続せずに使えます。外部の出典リンクを開くには接続が必要です。

<https://paulineletters.com/ja/explore/resources/pauls-coworkers>

© Pauline Letters · CC BY 4.0 · MIT

ダウンロードできる体験型教材の独自コードはMITライセンスで提供します。本文と画像には、それぞれ表示された再利用条件が適用されます。

▶ 再利用の条件